

アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

2000. 3. 31

No. 44

ルウンベ（木綿衣）

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が実施する「平成11年度アイヌ生活文化再現マニュアル～木綿衣編」の製作に、当館から2名が参加。アイヌの木綿衣の一種ルウンベを複製した（写真左）。

原資料は児玉コレクション。複製の過程で、昭和9年、30年に木下清蔵氏が撮影した複数の写真に同資料が着用されていることが分かり、それまで来歴不詳だった資料の収集地・使用歴・補修歴などが判明した。（3・4頁）



複製したルウンベ（河岸麗子作）



原資料を着用した写真（木下清蔵写真90070部分）
現在は児玉マリ氏が所蔵している。

2000年という新しい時代に

山 丸 和 幸

昨11月、財団法人アイヌ民族博物館第二代理事長熊野末太郎氏の病気療養による退任を受けて、第三代理事長に就任したのを機に、2000年という新たな時代を、文化伝承の現状から考えてみたい。

1997年7月に施行された「アイヌ文化振興法」と、同法のもとに設立された「財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構」の存在は、いま、アイヌ文化伝承・保存の姿を大きく変えようとしている。すなわち、同機構からのアイヌ文化振興のための助成金交付により、全道各地で儀式・儀礼が実施され、また、伝統工芸品の製作が盛んになってきた。

これまでのアイヌ文化がたどってきた道を見ると、これら文化振興はまことに喜ばしいことであると考えられる半面、いささかの危惧をも覚えるのである。

つまり、そういった活動が「安易」に流れてはいないだろうか、ということである。たとえば、一例に衣服の製作を見てみよう。古い時代のアイヌは、その施文の術等を幼少の頃から母や祖母に学び、その集成されたものが「ハレ着」として、生活の重要な一部分を担ってきた。

現代においては、どうであろうか。講師を頼み、あるいは、アイヌの衣服を掲載した書籍のなかにある見栄えのいいものがコピーされ、美しい衣服がつくられるが、表面的な「出来栄」云々に終始している観があり、そこにはどうしても伝統文化が見えてこないのである。「モノをつくる」ことと、「文化を伝承する」こととは違う。

確かに、文化は時代とともに変容する。アイヌ文化もしかりである。アイヌ文化が現代の文化と融合し、新たなものが創造されることは時代の趨勢であり、否めないところである。しかし、変容させた文化のなかに「伝統」 エカシヤフチの教えが存在しなくてはならない。

上述した、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の助成金は、アイヌ文化振興に大きく貢献していることは事実であり、評価されるべきである。しかし、助成金を受け取る側 文化を創造・伝承する側が、この助成金に頼るを恒常的なものとした場合、真の文化伝承は生れてこない。すなわち、助成金を側面的かつ一時的なものとし、他に頼らざるをもって、自らの力で文化を伝承・保存しなければならないと考える。併せて、生活基盤の安定が必須であり、生活基盤の安定を見ないで、文化活動に終始するは、本末転倒である。

アイヌは、時の為政者によって翻弄されてきた歴史を持つが、しかし、その独自の文化は絶えることなくいまにある。その文化を後世に伝える担い手である我々は、いま一度、エカシヤフチの教えを学び、真の文化伝承者として、2000年という時代を歩まなければならないと考える。

(財団法人アイヌ民族博物館理事長・館長)

衣服の複製について

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（以下「機構」）は現在、「平成11年度アイヌ生活文化再現マニュアル～木綿衣編」を製作中である。北海道各地のアイヌの木綿衣のなかから、ルウンペ（白老）、チカラカラベ（札幌）、カバラミブ（浦河）、チヂリ（帯広）の4種を取り上げ、その製作方法を今年度はビデオに収録、次年度製作する解説書とセットにして平成13年度以降、一般に貸し出される。機構の委託を受け、当館特別学芸員の児玉マリが全編を監修、白老地方のルウンペは、児玉コレクションを元に当館職員の河岸麗子が複製作業にあたり、2月下旬にビデオ収録を終えた。

3月19日の第6回アイヌ文化教室では、原材料と複製資料を演壇の左右に配し、河岸麗子職員の話を変えながら、監修者である児玉マリ特別学芸員が講演、41名が受講した。以下はその抜粋である。

……

今回マニュアル作成事業で取り上げた木綿衣は4種類ありますが、4つとも全部完成いたしました。もう機構に納めなきゃならないんですけど、白老のルウンペは今日のためにお借りしておきました。

複製は11月末頃から始めましたが、撮影があるものですから、何度も縫い直したり、早く縫いすぎてそこほどこいてくれと言われてたり、いろいろ苦労があったんですけど、河岸さんは怒りもしないでやってくれました。そうして出来上がったのがこの着物です（次頁写真1）。

オリジナル（写真2）は、30年程前に父（故児玉作左衛門博士）が骨董屋で買って保存していたもので、どの地方のものか分からないけれども、まあ白老らしいと言ってたんですね。そしたら今回、河岸さんがこのルウンペが写った写真を探してくれまして（表紙写真下）、実際に白老の方が着ていたことが分かりました。

写真（表紙）と比べていただければ分かりますけれど、（写真2は）二次加工してあるんです。ウエストの下の部分がもともと木綿の縞

だったんですけど、そこがぼろになったのか、普通の紺の布に直してあります。また、ルウンペによく使われる縞の布が使われています。小袖なんかに使っているもともと日本刺繍のあった布も使われています。それから下のほうの虫喰いのある部分はメリンスです。木綿も一種類ではなくて、複製するにあたって布を探すのにだいぶ苦労いたしました。

お配りしたコピー（次頁図）はまつるときの技術なんですけど、普通の和服のまつり方と逆になっているんです。上の方は普通の和服のまつり方ですね。そして下の方がルウンペです。糸目が和服とは逆で、「ノ」の字になった目が入っています。最初のうち難しいと言ってらしたんですけど、河岸さん、いかがでしたか？

（河岸）「ノ」の字でまつりますと、上から針を押しさえる形で布に刺すわけです。今までの普通のまつりは奥から手前側に針が入りますから、押しさえるというよりも逆に、布を浮かせる感じで留めますよね。実際「ノ」の字でやってみると、すごく道理に合った仕事ではないかと思いました。とにかく初めてなので正直慣れない仕事でしたけど、だんだん慣れていくうちに要領も分かってきました。

（児玉）その留め方に気がついて、それから古い着物を出して調べてみると、ほとんど全部がこれなんです。どこで和服のまつり方に変わったか分からないんですけど、切り伏せは大体



ルウンペ（複製）を前にした河岸麗子と児玉マリ



写真1 複製資料



写真2 原資料

これです。それからアットゥシを留めるときもやはり同じでした。そういうのを面白いと思って、いろんなお勉強させていただいたわけです。

……

ルウンペというのは、分類から言えば大体噴火湾沿いにある着物で、北海道の南のほう、つまり八雲あたりから虻田、伊達、洞爺のあたりをずっと越えて、そして噴火湾を抜けて白老にも残っております。

30年程前に衣服の調査をした時に、着物の名前が残っていて形の分からないところ、着物はあるけれども名前の分からないところ、それから着物も名前も残っているところ、この3カ所に分けてみました。そのときの調査で、白老にはルウンペという名前と着物の両方が残っていて、しかも独特だということで、今度もその着物を作ってみました。

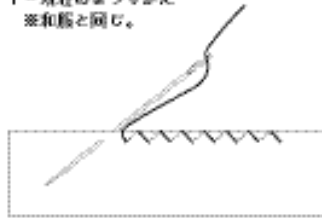
ただ、これからお仕事なさる方はぜひ名前と着物の両方を残していただきたいと思っています。今は便利な時代になりましたから、みなさん車で博物館へ行って、気に入った着物があると写真を撮ってくる。手で描かないでコピーをする。そういうのがだんだん増えてきて、地方差というのが薄れてきたようです。

中でもいちばん多く作られているのはカバラミブです。その町に昔からあったものではないかも知れないんですが、どこの町でも作っていて、踊りなどの衣裳にしています。ですからみんなが同じような形のものを着ています。そ

れでも技術として残っていればいいのかも知れません。着物を作ることから離れないということは大変いいことなんです。私もこの頃だいぶ年を取っておとなしくなりましたね、「これではなくてはだめ」というのはやめました。ですからぜひみなさまも作っていただきたいと思うんです。面倒かもしれませんが、ミシンを使わないで手縫いで作って、ご自分の衣裳にしたり、室内着でもいいです。そういうことをして、アイヌの着物というものの伝統を絶やさないようにしていただきたいと思っています。

(文責：浅野みどり)

1-現在のまつりかた
※和服と同じ。



2-古い着物の多くは、糸目が「ノ」の字に出ている。
※イカワリ(コーフステッチ)も同様。



図 切り伏せのまつり方

新収蔵資料紹介

資料名：木綿衣(アイヌ語名：ルウンペ ruunpe)

寄贈者：平 三雄

寄贈年月日：平成12年1月28日

製作者：平 ハル 製作地：室蘭絵鞆

製作年：明治末頃 使用者：平ハル・平三雄

使用年代：明治～平成

計測値：総丈	136.5 cm	着丈	127.5 cm
裾	60.5 cm	裾周	124.0 cm
前幅	31.0 cm	後幅	31.0 cm
袖幅	30.5 cm	袖丈	48.0 cm
袖口	17.5 cm	衿肩明	15.0 cm
衿高	6.5 cm		



資料解説

木綿製の晴れ着。地布には、生地が違う紺木綿2種を、袖に縞木綿を使用し、前身頃の腰の部分に捺染の柄木綿を接いでいる。

仕立ては、和服と違い衿がない。背縫いや脇縫いは縫いしろがほとんどなく、布の耳ぎりぎりのところを木綿糸で縫い合わせている。袖は、袖下が輪になるもじり袖。袖に使用した布が足りなかったのか両袖に5～6cmの緑色の木綿布を継ぎ足しており、切伏せ文様とはまた違うアクセントとなっている。

文様は、絹や木綿の細いテープ状の布を置き、その上から木綿糸で刺繍を施している。背と胸の切伏せには絹布が使われ、絹の置き布のまわ



りをイラクサの糸でかがっている。袖と裾まわりの文様には白と柄の木綿が使われている。

文様の置き布が絹と木綿部分では地布が違うことや、地布によって文様を縫いつける糸もイラクサと木綿とに分かれることから、身頃の胸と背の部分と、袖や裾まわりでは製作時期が別であると考えられる。絹の布を大切にしていたのか、背の文様が代々平家に伝えられた文様であったのか、いずれにしても傷みやすい裾まわりや袖を後で付けなおしたのと思われる。

収蔵の経緯

製作者である平ハル氏は、寄贈者の平三雄氏の父平三郎氏の姉にあたり、明治20(1883)年に生まれ、昭和51(1976)年に亡くなるまでの93年間を現在の室蘭市絵鞆で過ごした。

この着物はハル氏が自分のために制作したもので、三雄氏はハル氏が亡くなった昭和51年に形見分けとしてこの着物を譲り受け、その後、儀礼や行事に参加する際にこの着物を着て出席していた。

昨年、三雄氏が博物館来館の際に、絵鞆の着物ということで見せていただいた。博物館資料として複製させてほしいと願い出たところ快く承諾いただき、以来、着物を借用して複製資料の製作に取りかかっていたが、今年1月に博物館の資料として活用してほしいということで、当館に寄贈されることとなった。

三雄氏によると製作はたぶん明治末くらいであろうということであった。多少の劣化は見られるが、製作者や製作年代、製作地、使用者が明確なアイヌ衣服資料は国内においても数が少なく、大変貴重な資料である。

(村木美幸)

屋根に立てる「何か」について

写真1は、当館収蔵資料「木下清蔵写真」の一枚である。白老で写真館を営んでいた木下清蔵氏が昭和初期、白老のチセ（家）を撮影したもので、原資料はガラス乾板。

母家の棟の両端に注目してほしい。何かが避雷針のように立っている。筆者はプリント写真を見て一般的なイナウ（木幣）が朽ちたものだと思っていたが、原資料を拡大してみると（写真2）、棒の上から垂れているものはイナウの削りかけにしては幅が広すぎる。一見鎌のようでもある。

木下写真には同じ被写体と思われる写真が他に2枚あるが（資料番号90009, 90010）、撮影時期が異なるようで、鎌の刃に見える部分の向きが変わっていたり、失われてただの棒になっていたりする。ということは鎌ではない。あるいは笹の葉だろうか？

1997年に新築した当館の復元家屋ポロチセは、棟の東端にタクサイナウ（手草の木幣）と呼ばれる木幣を1本立てた（写真3）。これはストウイナウ（棒状の木幣）の周囲に笹をびっちり巡らせたもので、一見写真2とは似ても似つかないが、しばらくすると笹の葉が抜け落ちて似た状態になる。ただ、ポロチセのタクサイナウは、笹の葉がなくなった後にストウイナウが残り、やがて削りかけがなくなってただの棒になるという経過をたどった。写真2がタクサイナウだとすれば構造が異なるのかも知れない。

ポロチセのタクサイナウは新築祝の祭主を務めた葛野辰次郎氏（静内地方伝承者）の伝承によっている。この伝承は静内・新冠地方に分布し、疱瘡神を祭り神とする限られた家系に伝わる。タクサイナウを立てることでその家が疱瘡神と縁戚であることを示し、伝染病が流行してもその家を守ってくれると言われる。アイヌ社会の中でもかなり珍しい風習であり、白老にはこれに類する伝承はないが、同じ系譜の人がいたという話もある。

いずれにせよ推測の域を出ない。この写真を見てピンときた方は、ぜひご教示願いたい。



写真1 資料番号90007（木下清蔵写真）



写真2 資料番号90007拡大



写真3 ポロチセのタクサイナウ

ポロチセの新築祝については、アイヌ民族博物館『伝承事業報告書 ポロチセの建築儀礼』（2000年3月刊行 p.8「新刊紹介」）参照。

（安田益穂）

博物館短信

平成11年度アイヌ文化教室

第4回 / アイヌ文化講座

テーマ：「アイヌ絵のなかの蝦夷錦」

日 時：12月10日（金）18:00～20:00

会 場：アイヌ民族博物館映像展示室

講 師：中村和之（釧路湖陵高校教諭）

受講者：43名

- * 現存する蝦夷錦とアイヌ絵に描かれている蝦夷錦を比較し、どこまで写実的に描かれているか、その特徴について報告した。また、蝦夷錦がアイヌ社会から和人社会に流出していた背景を中国資料を元に検討した。

第5回 / アイヌ語講座

テーマ：「まじない言葉でおぼえるアイヌ語」

日 時：2月11日（土）・12日（日）

17:00～19:00（両日共）

会 場：アイヌ民族博物館映像展示室

講 師：中川 裕（千葉大学教授）

受講者：95名（延べ）

- * NHK「アイヌ伝統音楽」の音声資料を教材に、アイヌ語のヒヤリングを交えながら日常生活で使えるまじない言葉を学んだ。

第6回 / 衣服文化講座

テーマ：「衣服の複製について」

日 時：3月19日（日）17:00～19:00

会 場：アイヌ民族博物館映像展示室

講 師：児玉マリ（当館特別学芸員）

受講者：41名

- *（詳細は3～4頁参照）

白老町文化財指定

3月30日、当館所蔵の児玉コレクション2,279点が白老町文化財に指定された。

児玉コレクションは、児玉作左衛門博士（1895-1970）が収集。1981年に当館に寄託、1997-1998年に児玉マリ（当館特別学芸員）の手によって寄贈され、今日に至っている。個人の収集としては質・量ともに世界有数のアイヌ民具コレクションとして知られる。1998年以

来、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の助成を得、詳細な資料調査を実施している。

新収蔵資料

受入日：1月28日

資料名：木綿衣（ルウンペ）1点

寄贈者：平三雄氏（室蘭）

（詳細は5頁参照）

職員派遣

名寄市北国博物館「北国歴史講座」

期 日：1月18日

テーマ：「アイヌ民族の手仕事」

- * 村木美幸学芸員が、アイヌの衣服や道具など、生活や儀式で活用された手づくりの品物や、その製作工程などをスライドを用いて解説。地方による特色や、今日の技術伝承の現状などを話した。

白老小学校「地域文化にふれる集い」

期 日：2月18日

会 場：白老小学校

出 演：10名

- * 地域に古くから伝わる文化への関心を高めようと同校が1994年以来毎年実施している文化行事。講師役の当館職員10名が全校生徒200名の前でムックリを披露し、イヨマンテリムセを指導した。

道立北方民族博物館講座「北の海と川のめぐみ」

期 日：2月19日

テーマ：「アイヌの食について」

- * 村木美幸学芸員が、アイヌ語でシベ（本当の食べ物）と呼ばれるサケの利用部位や調理法を中心に、植物や動物の利用とその供給、保存加工についてスライドを交えて解説した。

SPb AINU PROJECT研究会

期 日：3月3・4日

- * 千葉大学で開催された標記研究会に児玉マリ特別学芸員、村木美幸学芸員の2名が参加。3年間に及んだロシア国立民族学博物館におけるアイヌ資料の調査が終了したのに伴い、調査研究の総括及び成果報告について協議した。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構「アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業」

期 日：3月16・17日

派遣先：ヤイユカラの森（札幌）

- * 樺太アイヌの帯織りについて、野本正博学芸員補が、用具の製作法および織り方の基本を指導した。

遺跡発掘報告会

期 日：3月17・18日

テーマ：「アイヌの霊送り」

- * 余市町教育委員会主催の標記報告会にて、秋野茂樹学芸課長が、アイヌの送り儀礼について、イヨマンテを中心に、スライドを交えながら講演した。

国際交流

台湾行政院原住民委員会主催「Thanks giving Meeting」

期 日：12月13日

- * 1999年9月21日に発生した台湾中部地震で罹災した原住民への当館の義援活動に対して、台湾行政院より感謝状と記念品が贈られた。授与式は「Thanks giving Meeting」と題

して、台北市内のテレビ局で行われ、台湾全国に放映された。同式典には、台湾行政院の招待で、山丸和幸理事長、秋野茂樹学芸課長、陳静宜職員が参席した。



テレビ局での授与式

年間入場者

11年4月	15,742	10月	64,397
5月	45,781	11月	25,566
6月	56,094	12月	15,598
7月	47,089	12年1月	8,479
8月	44,339	2月	24,480
9月	49,308	3月	9,237
		計	406,110

新刊紹介

伝承事業報告書「ポロチセの建築儀礼」

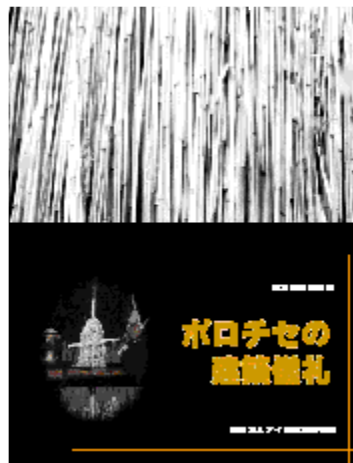
3月31日発行 / A4判196頁（カラー100頁）

頒価2,100円（当館ミュージアムショップ扱）

1996年12月20日のポロチセ（当館の復元家屋）の火災と、ポロチセ再建に伴って実施された儀礼の報告書。

第一章では、火災後の魔払いの儀礼、地鎮祭、新築祝い、祭り神の安置、物送りの儀礼など、約6か月間、20回以上にわたった儀礼について、のべ139時間分の録画・録音記録を元に、祭具、進行、作法、祈り詞などを図版・写真を多用して詳述。葛野辰次郎（静内町在住伝承者）、藤村久和（北海学園大学教授）両氏の指導・伝承を記した。

第二章では、アイヌ語の祈り詞8編について原文・和訳の全文を掲載。巻末に儀礼の進行・用語解説、索引等を付した。



アイヌ民族博物館だより No.44

発行：財団法人アイヌ民族博物館

〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4

T E L : 0144-82-3914

F A X : 0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 2000. 3. 31

印刷：株式会社北海道機関紙印刷所

〒006-0806 札幌市北区北6条西7丁目

T E L : 011-716-6141

F A X : 011-717-5431